

2025年1月22日 [造船新トップの素顔](#)



《造船新トップの素顔》 三井E&S造船 柴田憲一社長

— 造船業を志望した理由は。

「地元の大阪大学に進学を決めて、いろいろな学科を見ている中で、船舶海洋工学が面白そうだなと思ったのが始まりです。資料の中にあつた波浪発電や潮流発電といった文言に惹かれて、海の技術を学んでみたいと思いました。ただ、実際に学科に入ると、発電ではなく造船の授業ばかりだったんですが（笑）。その後に大学院に進学し、就職先も自然と造船所を選びました」

— 就職先として常石造船を選んだ理由は何ですか。

「当時の神原勝成社長のもと、会社に勢いが感じられたのが理由の1つです。また、小葉竹さん（前三井E&S造船社長、元常石造船副会長）が大学の先輩なのですが、私が学生時代に、既に常石造船に入社していた小葉竹さんがごちそうしてくれて、会社について熱く語っていたのを覚えていて、楽しそうな会社だという印象を持っていました。大学の先生からも、常石造船を勧められたこともあり、決めました」

— 入社後は設計が長いですね。

「入社時は基本設計部で、途中で組織名が商品企画部になりましたが、入社から商品企画部長になるまでずっと所属していました。その後2021年に設計本部長に就任してフィリピンと中国の設計も統括するようになりました」

— 入社後は造船ブームで、設計や開発が多忙だった時期と思います。

「入社して初めはお客さんとのネゴの部隊で、その後に開発に移りました。最初に開発を担当したのは58型バルカー『TESS58』で、楽しかったですね」

— これまでで一番印象に残っている仕事は何ですか。

「2007年頃に手掛けたケーブルサイズ・バルカーが、思い入れのあるプロジェクトです。当時は造船業が好調で、常石造船もフィリピン・セブで第二工場を建設していました。ここでケーブルサイズを建造することになり、設計を担当しました。それまでハンディマックスが主体だったセブがいきなりケーブルサイズを建造する、しかも工場を建設しながら基本設計を行うという、チャレンジングなプロジェクトでした。工場がまだできていない中で、建造の様子をイメージしながら、搭載の姿や組み立ての流れなどを船殻の担当者と一緒に勉強して取り組み、貴重な経験でした」

— 1月から三井E&S造船の社長に就任しました。抱負をお願いします。

「三井E&S造船は2021年にファブレスの新しいビジネスに転換し、歴代社長と社員が構造転換に苦労しながら今の会社の姿を作ってきました。この方向を変えることは考えておらず、まずはこの3年間で築いた姿をしっかり引き継いでいきたいと思っています。当社の強みの1つは、船舶の設計や商品開発などエンジニアリング力。もう1つは、船内のデータモニタリングや統合操船装置、自律操船技術などのシステムインテグレーションです。こうした分野でのフロントランナーになっていますから、この先進性を維持して、さらに先へと進化させ、技術でお客さまに貢献できるように頑張っていきたいと思います」

— 社員に求めたいことは。

「まずはチャレンジ精神。これは会社の成長のために必要なことです。技術革新を生み出すためには、失敗を恐れず積極的に新しいアイデアやプロジェクトに取り組んでももらいたいです。もう1つはコミュニケーション。これが組織力の強化に繋がります。社内の意見交換やお客さまとの情報共有を活発にして、職場環境がより一層良くなればと思います」

— ところで、ご趣味は何ですか。

「クラシックギターです。あまり上手ではありませんが、大学生の頃から演奏しています。社会人になって少しやめていたのですが、その後に再開しました。ギターを弾いている間は没頭できるので、気分転換になりますね」

— 座右の銘、好きな言葉は。

「常石造船の行動指針に、『変化に適応し続ける』と『信頼される人になる』という項目があり、これは良い言葉だと思っています。世の中のスピードが速くなっていて、これに乗り遅れないようにするには、自分の価値観を柔軟に変えていくことも重要です。なるべく人の話を聞くことや、自己研鑽が大切だと思っています」

— 造船という仕事を一言で表すと。

「今後も成長革新が生まれる産業。歴史の長い産業ですが、まだ伸びしろが大きく、成熟産業ではありません。今後のキーワードはグリーンとデジタルですので、当社もこの分野で、日本の造船業界全体の成長革新の一助になればと思います」（聞き手：対馬和弘、松井弘樹）

【しばた・けんいち】2000年大阪大学大学院工学研究科修了、常石造船入社。2021年執行役員設計本部長、22年常務執行役員設計本部長、2023年常石エンジニアリング社長兼務。25年1月三井E&S造船社長就任。1975年12月生まれ。

海事プレスに掲載の記事・写真等の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

© Kaiji Press Co., Ltd. All rights reserved.

No reproduction or republication without written permission.